タウントピックス
TOWN TOPICS

パワーアップ教室 ただ今、好評開催中!

無理なく、楽しく筋力の向上を図り、生活習慣病の予防とともに肩こりや腰痛、関節痛などの解消を図るパワーアップ教室を6月から実施しています。40代から70代までの164人の方が6会場に分かれて参加されています。

教室では、それぞれ個人の体力、筋力等を測定し、体の状態を聞き取り、そのデータにより運動プログラムを作成して、健康運動指導士等の指導のもと運動を行います。

1時間30分の教室は、前半は集団で、膝、腰、肩などの運動プログラムを講義も取り入れながら、楽しく笑顔のたえない中で実施しています。後半は、それぞれが自分の筋力の弱い部分を補う運動プログラムを指導員の指導のもと、教室生同士で励まし合いながら実施しています。

また、教室の開催日で都合の悪い日は、別の会場へ行くこともできますので、新たな交流も楽しみのひとつとなっています。

最終日には、教室生みんなが笑顔で「参加してよかった」と言えるよう頑張っています。

10月から、第2次の教室を実施する予定で、9月から募集をします。

興味のある方で、教室の見学を希望される方は、最寄りの保健センターにお問い合わせください。

（健康推進課）

奨学金貸与申請の受付が始まります

平成19年度を対象とした高島市清水安三育英資金貸与申請の受付が始まります。

市では、経済的理由により大学（短期大学を含む）、修学年限2年以上の専修学校で学ぶことが困難な方に対して、清水安三育英基金を奨学金として貸し付けています。

《清水安三基金の趣旨》

旧新旭町北畑出身の清水安三氏は、戦前に宣教師として中国に渡り教育に尽力され、終戦後、帰国して東京都町田市に桜美林学園を創立し、人材育成に専念されました。優れた人材と向学心に燃える後進育成のためにと旧新旭町に寄付された資金を基に「清水安三育英基金」が設立されたものです。

◎高島市清水安三育英資金貸付制度

▼申請対象

高島市内に本人もしくは保護者が居住している方

▼貸付額

大学・修学年限2年以上の専修学校
- 一　般　月額3万円を限度
- 特　別　月額5万円を限度

▼償還期間

貸与期間終了後、1年の据置期間を含め6年以内

▼申請受付期間

8月1日（火）～8月18日（金）

（在籍する学校を経由して提出してください。）

▼選考方法

書類・作文・面接（面接日は後日通知）により貸付決定します。

◎その他基金の貸与申請

●高島市高島屋奨学金育英資金貸付制度

平成18年11月頃を予定しています。（詳しくは、市のホームページをご覧ください。）

受付・問

学校教育課

☎（32）4473

市長日記

暑中お見舞い申し上げます。しっかり食事をとって、心も体も元気溌剌で参りましょう。

夏の訪れとともに市内小中学校の多彩な取り組みが度々紙面を飾ります。カヌーや遠泳、レガッタ大会。川や琵琶湖を探検し、農に学ぶなど、よい舞台と熱心な指導やお支えがあるお蔭です。高島市のお家芸にしていきたいですね。

「国家の品格」には、論理・知識より先ず情緒を育てることが大事だと記されています。武士道にみる惻隠の情や美の感覚。日本が誇る豊かな心は美しい郷土でこそ育つと。

さて、私達は七夕の日の直前に、両親からの虐待によって2歳7ヶ月の幼い命をなくしました。4年前に転入されて以来200回を越える訪問や電話連絡をとってきたのでした。みんな悩みや不安を抱えていますし、人は因と縁によって神や仏にも鬼や悪魔にもなります。きちんと検証し、子どもを守る高島市の方法を考えます。

16日には、青少年育成市民会議の想いが「子ども祭り」となりました。翌17日には、高島市PTA連絡協議会が発足されました。

記念講演は「食べる、生きる、育つ」をテーマにした坂本廣子先生の「食育」の話。90％の脳が完成するといわれる概ね6歳までに、五感の基礎体験（食の基礎体験）をなるべく沢山させることが大切で、その気持ちを正確に言葉と繋ぐことが読解力を高め、自分で考える力を作るのだと話されました。

水が不味いと、お茶はペットボトルで買うものになり、茶の葉や急須を知らない子どもが増えているそうです。そういえば包丁を使わない暮らしを聞いたことがあります。何かにつけ作るより買う暮らしは、インスタントや似せ商品、疑似体験に占領され、本物体験を遠ざけて行きます。我が家もそうです。

ニートといわれる「働かない、学ばない若者」の背景には、子どもの4分の3が「自分はダメなんだ」と思っている自信のなさが潜んでいるそうです。

自信や生きる力の土台となる自尊（自分は素晴らしいと思えること）の基礎は、全能感（何でも出来、何にでもなれる感覚‥ベルトを巻くと勇者になれる）がある6歳頃までに、質の高い基礎的体験を積み重ねることによって培われるとのこと。

講師は、園児がご飯を炊き、食材を探検し、包丁を使って掌の上で豆腐を切り、「自分でできた」を積み重ねていく姿や、幼稚園児が「売ってるものは、何だって作れるよね」と自信満々で卒園していったことを紹介されました。

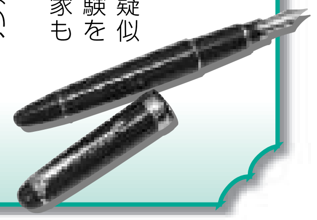
これは、家庭で十分にできない「食と心」育てを、全く違う人が、全く違う場所で為し得た事例でもあります。「食育」は、宗教や道徳の柱がない私達が、感謝や作法や日本人の知恵を学ぶ場でもあるようです。

大人も大変ですが、子どもにはもっと大変な時代に立ち向かっています。

この夏休みに開講した「了佐てらこや小学校」は、学校では自信がないけれど、学びたいという気持ちに応えるべく、論語の素読などを取り入れ始めてくださいました。

お盆の形式も大事なのですね。ご馳走でなく手作りの「ごっつぉ」を伝えたい!?

海東英和　拝



シリーズ

環の郷 高島を目指して

その八

「長者のヒゲ」から「厄介者」へ 竹の文化の今むかし

◆『万能』の天然素材

扇骨といえば、全国生産のシェア9割を誇る高島の代表的な地場産業として有名です。その扇骨の素材といえば竹ですが、この竹はかつて、わたしたちの日々の生活にとって大変重宝な植物でした。カゴやザル、家屋の建材はもちろん、谷川の水を引く自家水道のパイプであるとか、田舟を操る棹（さお）、刈りとった稲を乾かす稲木にも使えば、火力の強い燃料としても役立ちました。そして春には竹の子が季節のおいしい食材になる。家計の面でも、竹の皮は肉や弁当を包む素材として売ればお金になったので、竹薮は「長者のヒゲ」と言われることもありました。今年2月に北船木漁業協同組合の簗（やな）が「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選ばれましたが、そんな簗にも、エリ、モジ、タツベといった漁具にも、竹は使われていました。竹は衣食住あらゆる場面で使われる、まさに“万能”の天然素材だったのです。

◆増える竹林が森林を駆逐する

「地震が起きたら竹薮へ走れ」とは、強靭な竹の根が地割れを防ぐという考えからでた知恵でしょう。河川の堤防にも、しばしば竹が植えられました。しかしながら、そんな竹も、化学素材に取って代わられ、かつてほど使われなくなりました。「裸足で歩けた」ほどに手入れが行き届き、美しかった竹薮は打ち捨てられて、誰も関心を寄せなくなったのです。その結果、人の管理を離れた竹が年々はびこって、里山の木を駆逐したり、病気で大量に枯れたりするなど問題が生じることになりました。こうした状況を何とかしようと、ボランティアの人々が管理に乗り出したり、竹の新たな活用法を研究する動きも始まっています。

◆「環の郷」交流・研究センター夏のまつり

滋賀県立大学と京都精華大学では、住民の方々のご協力のもと、地域の様々な文化を研究していますが、今回、その成果の中から、竹の文化をテーマに発表する“「環の郷」交流・研究センター夏のまつり”が**8月26日午後1時30分から、安曇川ふれあいセンター視聴覚室**で開催されます。身近に「あるもの」を活かした生活の知恵に触れてみてはいかがでしょうか。（参加費：資料代として500円が必要です。）